

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

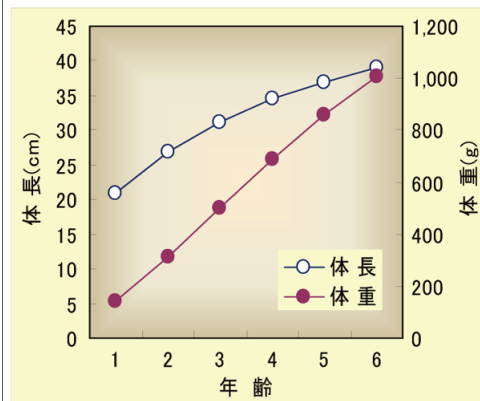
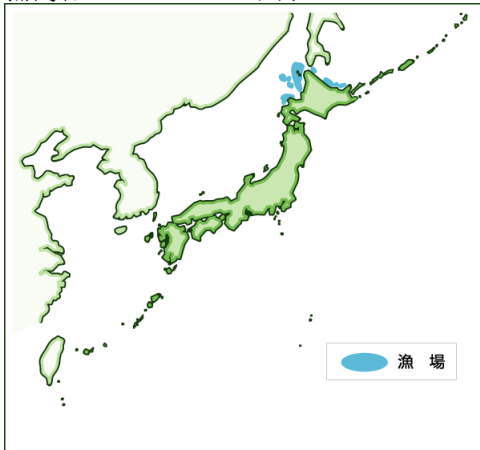
系群名 道北系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8～9歳
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 9月中旬～11月上旬、利尻・礼文島の沿岸および武蔵堆の最浅部で産卵
索餌期・索餌場: 稚魚・幼魚期に主としてオホーツク海の表層で生活し、着底後に大部分は日本海へ移動
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成年期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は、様々な種類の動物を捕食
捕食者: 不明

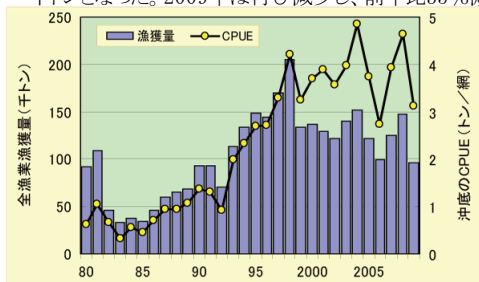


漁業の特徴

ホッケ道北系群は、沖合底びき網(沖底)、刺し網、底建網、サケ定置網などによって漁獲される。漁業種類によって主漁場および漁期は異なる。漁獲量の6割程度を日本海における沖底が占めており、日本海の沿岸漁業およびオホーツク海における沖底が1～2割を占めている。

漁獲の動向

ホッケ道北系群の漁獲量は、1980年代後半以降増加傾向にあり、1998年に20万トンを超えたが、2000～2005年は12万～15万トンで推移していた。2006年に10万トン以下に低下したが、2007年以降は再び増加し、2008年には147千トンとなった。2009年は再び減少し、前年比35%減の96千トンとなった。

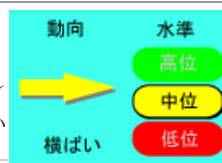


資源評価法

沖底については、1990年代半ばに漁具能率が向上したと考えられるため、長期的な沖底のCPUEを用いた資源量推定では、資源量を過大評価する可能性がある。そこで、過去30年間の漁獲量推移から資源水準を、漁具能率が比較的安定していると考えられる過去5年間の沖底CPUEおよび漁獲量の推移から資源の動向を判断した。なお、漁獲量と沖底CPUEの変化に加えて、調査船トロール調査、定置網および底建網のCPUE、沖底、定置網および調査船調査により得られた2歳魚以上の体長変化を評価の参考とした。

資源状態

本海域における過去30年間(1980～2009年)の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2009年の漁獲量は96千トンで46であったため、資源水準は中位と判断した。過去5年間(2005～2009年)の沖底CPUEおよび漁獲量は連続した増加および減少傾向は見られないため、資源動向は横ばいと判断した。調査船トロール調査のCPUEは過去5年間で見ると概ね横ばいで推移しており、定置網および底建網の漁獲量あたりの漁獲量や1歳魚以上の平均体長および最大体長においても大きな変化は認められず、動向が横ばいであることの判断材料になると考えられる。



管理方策

漁獲量の変動が資源動向を反映すると仮定し、過去30年間の漁獲量の平均値から資源水準を判断すると、1990年代後半から2004年までの大半が高位水準である。2005年以降は中位水準で推移し、2008年には高位水準となったが、2009年には再び中位水準に移行した。過去5年間の沖底CPUEおよび漁獲量の推移から、必ずしも安定的に推移しているとは言えない現状であるが、横ばいであると考えられる。ABClimitは、過去5年間の平均漁獲量(Cave5-yr)に0.9を乗じた漁獲量とし、ABCTargetは0.9Cave5-yrに不確実性を考慮した安全率0.8を乗じた漁獲量とした。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	106千トン	0.9Cave5-yr	—	—
ABCTarget	85千トン	0.8・0.9Cave5-yr	—	—

資源評価のまとめ

- 当該海域における過去30年間(1980～2009年)の漁獲量から資源水準を、過去5年間(2005～2009年)の沖底CPUEの傾向から資源動向を判断した
- 調査船トロール調査のCPUE、定置網および底建網の漁労体あたりの漁獲量、1歳魚以上の平均体長の動向も判断の参考とした
- 資源は中位水準、動向は横ばいと判断された

管理方策のまとめ

- 若齢魚主体の沖底漁業に大きく依存しているため、加入状況が悪化した場合は漁獲圧を低減する必要がある
- 調査船トロール調査、漁獲アンケート結果などから2010年は漁獲量が減少する可能性がある

執筆者: 森田晶子

資源評価は毎年更新されます。